

神奈川大磯における別荘居住者間の 関係性と別荘地の立地特性の変遷

小山七海*・荒井 歩*†

(令和2年2月20日受付/令和2年7月17日受理)

要約：神奈川県大磯は、その温暖な気候により近代に別荘地として注目された。1885（明治18）年に陸軍軍医である松本順によって海水浴場が開設されたことで別荘地としての発展が始まる。1887（明治20）年には国鉄東海道本線の大磯駅が開業し、1896（明治29）年に初代総理大臣伊藤博文が大磯に住んだことで多くの著名人が大磯に別荘地を設置した。本研究は、別荘居住者の職業属性と別荘地の所在地を調査した上で、別荘居住者間の関係性を明らかにした。加えて別荘居住者の大磯における行動状況も整理した。さらに、職業属性および入居年代毎に別荘地の立地場所の傾向を分析し、大磯の景観的特性との関係について考察を行った。調査の結果、別荘地では政治家を中心としたコミュニティが形成され、伊藤博文、陸奥宗光、西園寺公望、加藤高明、山県有朋の5名が別荘地形成のキーパーソンとして挙げられた。また別荘居住者は大磯において政治的交流や病氣療養を行っていたほか、地域のために寄付行動を行っていた。別荘地の範囲を地形特性に基づき8つの領域に区分し、各領域内における別荘地の分布状況を調べた結果、居住年代毎に別荘地の立地傾向に特徴があることが明らかとなった。

キーワード：別荘地、立地、地形、景観、大磯

1. 研究の背景と目的

神奈川県大磯町は、南に相模湾、北に高麗山、鷹取山を配する大磯地塊の丘陵地に囲まれ、県南部中央に位置する。海岸沿いに流れる暖流の影響から温暖な気候を有し、その気候条件から近代に別荘地として注目された歴史を持つ。

2017（平成29）年に伊藤博文邸等を中心とする建物群および緑地からなる明治記念大磯邸園の設置が閣議決定された¹⁾。「人物と場に着目した整備」が掲げられ、明治期の立憲政治確立に寄与した政財界人達の別荘建築群の活用が着目されている²⁾。

一方、大磯町景観計画においては、大磯町の地形的特徴を基盤に形成された「街並みの背景を緑が柔らかに引き締めているさま」を「緑陰」と位置付け、「近景にある沿道宅地の緑と遠景の丘陵地の緑の重層が、街並みを包み込む視覚的なまとまりを作る」ことを景観的特性としてあげている³⁾。

そこで本研究では、大磯における別荘地の分布傾向からみる立地選定と景観的特性との関係性に着目した。近代別荘地に関する既往研究は、十代田ら（1992）が戦前の関東圏における別荘地の分布と形成の契機、利用目的を整理し、別荘地をタイプ分類している⁴⁾。さらに十代田ら（1995）は、大磯の「禰龍館」と稲毛の「海氣館」を比較し、大磯における宿場町の衰退から海浜リゾートへの発展経緯を明らかにした⁵⁾。水沼ら（2016）は湘南地域を対象に、初期別荘地

や郊外住宅地の形成および景観構造に着目し、別荘地の立地や敷地規模、建ぺい率等を調査整理した⁶⁾。大磯の別荘建築に関しては、水沼（2011）、（2012）が明治・大正期の大磯の西小磯、東小磯における別荘建築に着目し、建築構造や家屋種別、敷地面積、所有年等の台帳整理をした^{7,8)}。さらに水沼（2016）は、明治期の家屋届を確認し、別荘地の立地や敷地規模、建ぺい率等の整理精度を高めた⁹⁾。なお、大磯町教育委員会においても文化財調査が実施され、入居年代における別荘地の区分や、別荘建築に関する詳細な調査を行っている¹⁰⁾。

これら既往研究により、大磯における近代別荘建築の文化財的価値は整理されたと言える。しかし、大磯を別荘地として選択した人々（以下、別荘居住者）の職業属性に基づく関係性について言及した研究は少ない。また、大磯固有の景観的特性を基盤とした別荘地立地の傾向を明らかにしたものはない。

本研究は、大磯を対象として近代以降の別荘居住者の入居年代および職業属性を整理した上で、別荘居住者間の関係性を明らかにした。併せて、別荘居住者の大磯における行動状況も整理した。さらに、大磯の地形特性に基づく領域区分を行い、入居年代ごとの別荘地分布の傾向を分析し、大磯の別荘地立地と景観的特性との関係について考察を行った。

* 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

† Corresponding author (E-mail : ayumi@nodai.ac.jp)

2. 研究の方法

(1) 大磯における別荘地形成過程の整理

文献調査より明治期における大磯町の行政区画の変遷を整理し、別荘地形成初期の大磯の範囲を規定した¹¹⁾。さらに大磯教育委員会資料(1992)による区分を援用・加筆修正し、居住年代の時代区分を3区分に整理¹⁰⁾した上で文献調査から社会背景と時代区分との整合性を確認し、別荘地形成過程を把握した。

(2) 別荘居住者間の関係性把握

a) 対象居住者の抽出

大磯教育委員会資料(1992)、大磯の今昔(四)(1990)、大磯の今昔(五)(1992)、大磯の今昔(六)(1994)、水沼の一連の論文から、明治期～昭和30年頃までに大磯に存在した別荘地を整理し、約470棟を確認した^{7-10,12-14)}。さらに別荘所在地の住所が確認可能なもの216名を抽出し、その別荘居住者を対象居住者として位置づけた。

b) 対象居住者の属性整理

大磯教育委員会資料(1992)、大磯の今昔(四)(1990)、大磯の今昔(五)(1992)、大磯の今昔(六)(1994)、水沼の一連の論文を用い、対象居住者の人名、別荘所在地、居住年代、職業属性、主な経歴を整理した^{7-10,12-14)}。

c) 対象居住者の行動把握

対象居住者のうち伝記や自伝等の資料が確認できた者を対象に46冊の文献を調査し、大磯に関する記述が確認できた対象居住者の行動を抽出、把握した¹⁵⁻³⁶⁾。

d) 対象居住者間における関係性の解明

文献調査より対象居住者間の関係性を調査しタイプ分類した上で、人物相関図として整理すると共に関係性の傾向を分析した。さらに関係性が確認された対象居住者間における居住時期の重なりについても分析を行った。

(3) 別荘地の分布傾向および変遷の解明

a) 大磯の景観的特性に基づく領域区分

国土地理院保有、明治29年測量2万平方図(1:20,000)を使用し、景観的特性に基づく領域区分のベースマップを作成した。

まず地形図上で尾根や谷、水系、道路の状況を確認し、地形に基づく領域を仮定した。次に現地調査を2019年11月に行い、仮定した領域が視覚的に景観のまとまりを形成しているか確認し、領域を地図で区分、ベースマップとした。

b) 別荘所在地の整理

対象居住者の属性整理で明らかにした別荘所在地を、ベースマップ上にプロットした。プロットは居住年代区分が視覚的に把握できるように整理した。また、対象居住者の職業属性別にも視覚的把握が可能なように整理した。

c) 別荘地の分布傾向の分析

居住年代区分毎の別荘地の分布傾向および変遷を、景観的特性に基づく領域区分との関係を踏まえながら分析した。

3. 研究の結果

(1) 大磯における別荘地形成過程

a) 行政区域の変遷

1889(明治22)年の市町村制施行により、現大磯町東部の高麗村、大磯宿、西小磯村、東小磯村からなる神奈川県淘綾郡大磯町と、現大磯町西部の寺坂村、生沢村、黒岩村、西窪村、虫窪村、国府新宿、国府本郷村からなる神奈川県淘綾郡国府村が成立した。1896(明治29)年に淘綾郡が、現在の大磯町から北側に位置した大住郡と統合し中郡となり1952(明治35)年には国府村に町制が施行され国府町が誕生した。その後1954(明治37)年に大磯町と国府町が合併し、現在の大磯町の区域となった。行政区域の変遷に示した通り、明治期の別荘地形成初期における大磯とは、現在の大磯町の東側を指しており、別荘地の始まりは大磯町東部から発展したと推察される。

b) 社会背景に基づく別荘地発展の経緯

大磯は鎌倉期より宿場町が形成され、江戸期には東海道の宿場町として発展を遂げた。明治期になると温暖な気候が注目され、陸軍軍医総監の松本順により1885(明治18)年に海水浴場が開設されたことにより大磯は別荘地として位置付けられていった。また海水浴場導入の一環として1887(明治20)年には国鉄東海道本線の大磯駅が開業し、東京から大磯への交通経路が確立された。特に1896(明治29)年の初代総理大臣・伊藤博文の大磯移住を契機に、多くの著名人が大磯に別荘を建てるに至った。

c) 居住年代区分の設定

大磯町教育委員会資料(1992)による居住年代の時代区分を参考に、より明確な年代設定を行い、大磯が別荘地として発展した明治中期から昭和35年までを3区分した¹⁰⁾。

第Ⅰ期(1904-1906):大磯が別荘地として注目され始めた明治中期から明治後期という既存設定に対して、日露戦争(1904(明治37)年-1905(明治38)年)が終結し、西園寺新内閣が成立する1906(明治39)年までと再設定した。

第Ⅱ期(1907-1923):民主化運動が展開された大正デモクラシーの影響下、実業家等が大磯に多数居住した明治末期から関東大震災が発生する1923(大正12)年という既存設定を援用し、1907(明治40)年から1923(大正12)年と設定した。

第Ⅲ期(1924-1960):関東大震災後の1924(大正13)年から昭和20年という既存設定に対し、戦後の別荘居住も複数確認できたことから1924(大正13)年から1960(昭和35)年までと再設定した。

d) 居住年代区分における社会背景の特徴

文献調査から区分した居住年代における社会背景を整理した。

第Ⅰ期(1904-1906):「東海道線の開通を始め急速に鉄道網が発達し、地方への到達性が飛躍的に向上したため、外国人、政府高官らの避暑願望、ステイタスシンボルへの欲求が表面化した」⁴⁾時期とされ、大磯の立地条件が別荘地としての発展に適合した。

第Ⅱ期(1907-1923):「実業家や商店主、会社役員など

が、多く大磯へ入ってきて別荘を建てるように¹⁰⁾ なった時期である。第一次世界大戦（1914（大正3）年-1918（大正7）年）に際し、好景気による新しい富裕層の増加と開発型分譲方式による別荘の大量供給により、別荘居住者の階層が広がり始めた。

第Ⅲ期（1924-1960）：関東大震災（1923（大正13）年）を経て、「震災によって一時避難してきた人たちがそのまま移り住むようになったり、一般庶民の間でも別荘を構える人達が出始め、庶民派型別荘が主流を占めるように」¹⁰⁾ なった時期であった。

（2）対象居住者間の関係性の把握

a) 対象居住者の属性整理

対象居住者の経歴を整理し、政界人（29名）、財界人（63名）、文化人（20名）、軍人（16名）、その他（23名）、不明（63名）の6項目に職業属性を区分した。

次に居住年代区分における職業属性ごとの入居状況を分析した（表1）。

第Ⅰ期に対象居住者の半数である101名の入居が確認された。政界人の入居は第Ⅰ期（21名）が多く一方で、財界人は第Ⅰ期（29名）、第Ⅱ期（23名）共に多くの入居が確認された。

b) 対象居住者の行動把握

文献調査から、対象居住者による大磯での行動が確認されたのは、27名67行動であった。

大磯での行動は、政治活動（10件）、懇親（9件）、療養（9件）、地域貢献（8件）、余暇活動（7件）、眺望（5件）、保養（6件）、園芸活動（5件）、散策（3件）、執筆活動（3件）、海水浴（2件）、の11種類に大別された（表2、表3）。

従来から指摘されていた大磯における政治活動や懇親等の他人との交流が多く確認された一方、療養、保養という静かにゆっくりと過ごす行動も多数行われていた。

散策、読書、執筆活動といった多様な余暇活動が行われ、特に園芸活動の記録が多く確認された。バラの栽培に傾倒する様の記述も複数みられた。

眺望に関する記述には、海、松原、江ノ島が眺望対象として挙げられ、富士山の眺望に関する記載が特に多かった。

伊藤博文が大磯駅から伊藤博文邸への往来に用いた統監道は、伊藤博文が韓国統監府の初代統監であったことに名前の由来がある¹¹⁾。この統監道は受益者負担で新設されており、原六郎、伊藤博文、鍋島直大、山県有朋、西園寺公望らが出資を行っていた。また、640戸を焼失させた大規模火災時には伊藤博文や岩崎弥之助らが救援金を寄せていた。このように対象居住者は、滞在するだけでなく、地域貢献として資金援助などにも寄与していた事が明らかと

なった。

c) 対象居住者間における関係性の解明

文献により対象居住者間の関係性を調査した結果、38名の関係性が明らかとなった。

確認した関係性は、①政治・公的（組織、機関等を公けにされた）なつながり、②個人的なつながり、③血縁・親戚関係のつながり、の3タイプ分類し、人物相関図を作成して分析を行った（図1）。

多くの人物との関係性が判明したのは、伊藤博文（13名と関係）、陸奥宗光（10名と関係）、西園寺公望（8名と関係）、加藤高明（7名と関係）、山県有朋（9名と関係）の5名であった。彼ら政界人5名と政治・公的関係を有する政財界人が別荘地に居住していたことがわかる。上記5名に対して重複した関係性がある人物が多く、5名が別荘地形成のキーパーソンであったといえる。

伊藤博文、陸奥宗光、加藤高明とは個人的なつながりを持つ人物も多く確認された。伊藤博文は文化人（新島襄や寺島清ら）と関係があり、対象居住者の多様な職業属性への展開に寄与したことが推察される。陸奥宗光の個人的なつながりは政界人が多く、政治活動を越えた私的な心情によるつながりが「親密」「友情」「思慕」等の文献記載から読み取れた。

また加藤高明は、徳川家や岩崎家などの財界人との個人的なつながりが認められた。特に岩崎家とは血縁関係を結んでいたため、他の政界人同士のように双方の関係のみで完結するのではなく、他の財界人（岩崎久弥、沢田美喜など）や文化人（ジョサイア・コンドル、中村吉右衛門など）へとつながりが派生していく傾向にあった。

一方、山県有朋はほぼ政治・公的関係性のみであった。1885（明治18）年に大磯に海水浴場を開設した陸軍軍医總監の松本順は、將軍侍医から幕府軍医を務め、山県有朋の勧めにより1871（明治4）年に兵部省に出仕した間柄であった。その松本が1887（明治20）年に旅館と病院を兼ねた禰龍館を大磯に建設したため、伊藤博文、中島信行、陸奥宗光、西周らが大磯に別荘を建てた。このことから、大磯が別荘地として展開する背景には、山県有朋と松本順の関係性が関与していたと推察された。

そこで人物相関を分析した38名の入居、在住年の整理を行った（図2）。

1887（明治20）年に入居した山県有朋と関係のある人物9人中8人が、山県有朋の入居後に大磯に居住し、大磯居住の20年間で共にしていた。同様に、在住期間がわずか3年と短期間であった陸奥宗光は1894（明治27）年に入居後、関係を有する5人が続けて大磯に入居し、同期間で大磯で過ごしていた。

伊藤博文が1896（明治29）年に入居する以前、関係を有する7人が既に大磯に居住していた。伊藤博文の入居を受けての大磯居住ではなく、彼らが伊藤博文の大磯居住のきっかけとなった可能性も考えられる。なお、伊藤博文と関係のある10名が伊藤博文の大磯在住期間、1909（明治42）年までの13年間で大磯で共にしていた。

一方、1899（明治32）年入居の西園寺公望と1902（明治

表1 居住年代別にみる大磯別荘居住者の職業属性

年代区分	属性						計
	政界人	財界人	文化人	軍人	その他	不明	
第Ⅰ期	21	29	5	12	20	13	101
第Ⅱ期	6	23	8	3	2	22	64
第Ⅲ期	2	6	5	1	1	11	26
不 明	0	6	2	0	0	17	25
計	29	64	20	16	23	63	215

表 2 大磯における別荘居住者の行動 (1)

行動	人名	居住年代	利用
政治活動	山縣有朋	I (M20～M40)	…大磯に滞在中の一〇月一三日、山県は井上毅法制局長官を招いて、条約改正問題の経過と利害損失を質問している。 ³³⁾
	加藤高明	I II III (M25～T15)	…伊藤公を訪ひ、相携へて大磯に至り、夜半まで公と當面の外交を論じ、… ¹⁶⁾ 又十六日には、所謂大磯秘密會議が開かれた。…伯の日記に據れば、『伊藤侯の招きに依り大磯に赴く。山縣、大山、西園寺の三侯…も亦曾す。 ¹⁶⁾
	斎藤たけ	I II (M25～M43)	(明治二十八年からおよそ十四年の間)「この間、総理大臣は、伊藤、松方、伊藤、大隈、山県、伊藤、桂とつづきました。まさしく、政治の中心地は大磯だったのです。お倉が大磯で第二富貴樓を經營していたのは、このあいだのことだったのです。 ²¹⁾
	陸奥宗光	I (M27～M30)	日清戦争後の陸奥は、大半の期間、大磯で療養している。…政治への関与は活発に行っていた。議論好きなのも、相変わらずである。 ³⁰⁾
	伊藤博文	I II (M29～M42)	伊藤公が大命を拜して(九月二十七日)組閣を了する迄(十月十九日)三週間、公を…大磯の滄浪閣に訪れた政客は、連日櫛の歯を引いた… ¹⁶⁾
	西園寺公望	I II (M32～T6)	…大事はみずから大磯の病床にある陸奥を訪ねて意見を聞いていた。 ¹⁹⁾
	寺内正毅	II (T7～T8)	(明33. 11) 二十八日 午前六時二十分発汽車ニテ大磯ニ至り伊藤首相ニ面談ス、夕帰宅ス、帰途出務ス ²²⁾ (大7. 9) 一日(日) 本日山県公ヲ小田原ニ訪フ。帰途大磯ニ泊ス ²²⁾ (大7. 10) 二十六日 本日ハ伊藤侯十時祭ニ相当ス。夜來ノ微恙ヲ以テ參拜セス。…明日ヨリ大磯ニ行クコトニ決ス。高木(兼寛か)男爵來訪 ²²⁾
懇親	浅野総一郎	I II III (M21～S5)	總一郎の傘下に働く人達のみを以つて、紫雲曾なるものを組織し、毎年春秋二回、大會を開催して、懇親を圖るの一端とす。嘗つて、大磯の別荘に、此大會を催したことがあつた。 ¹⁵⁾
	斎藤たけ	I II (M25～M43)	…伊藤博文が大磯に住まいを移したのに伴つて、大磯の別邸を第二富貴樓に仕立てて働いたが、… ²⁰⁾
	吉田茂	I II III (M27～S44)	政治家の方たちもしょっちゅう來られていましたが、海外からのお客様も、父が親しく存じあげている方がたが來日されたときには、かならず大磯にお招きしていたようです。 ³⁵⁾ 外務省の新人たちは父には後輩にあたりましたから、大磯でも毎年新入生を、亡くなるまえの年までおよびしていました。 ³⁵⁾
	大隈重信	I II (M30～T12)	…伊藤博文とは昔の親しさをとりもどしていた。これは彼が大磯町東小磯にある博文の別荘滄浪閣のすぐ前に別荘を買ってから、いっそう深まった。 ¹⁷⁾
	原田熊雄	II (M43～不明)	…原田は吉田の外相就任祝いを大磯の自宅で開いた。…、池田成彬、それに吉田と原田というメンバーだった。 ²⁶⁾
	中村吉右衛門	III (S12～S18)	…正子が五、六歳の時には、大磯に別荘をいとなんだこともある。この大磯のは安田靫彦の設計で、直ぐ隣りにたてたものだった。 ²⁴⁾ いよいよ病にたおれる前、…大磯に吉田茂や安田靫彦をたずねたりした。 ²⁴⁾
	島崎藤村	III (S16～S18)	藤村が大磯へ移り住むきっかけとなったのは、同年1月に俳優の天明愛吉や作家の菊池重三郎らに誘われて、大磯を訪れたことに始まる。 ¹⁰⁾
療養	新島襄	I (M23～不明)	…十一月二十八日から病氣療養のため大磯百足屋旅館愛松園に逗留した。 ¹²⁾
	陸奥宗光	I (M27～M30)	…陸奥は山県に書状を送っている。山県が発熱で引きこもっているとの新聞報道に接し、容体を気遣いつつ、翌春に大磯に来てはどうかと勧めた。 ³⁰⁾
	中島信行	I (M29～M32)	九八年には大磯の別荘に移り療養を続けますが、快復することなく、… ²³⁾ 中島信行と俊子の墓…大磯町・大運寺 中島信行は一八九九(明治三十三)年…に亡くなりました。信行の戒名は「大磯院殿長城大居士」、… ²³⁾
	寺島清	I (M32～M36)	大磯に海水浴場が開かれると、芝居の合間に禰龍館に宿泊して静養したので、これが大評判となった。 ¹²⁾ このころ菊五郎は軽い脳溢血をおこし大磯の別荘で静養につとめたが、…楽しみにしていた富士が見えなくなり、… ¹²⁾
	原田熊雄	II (M43～不明)	原田は大磯の別荘で寝たまま長く療養生活を送ることになった。 ²⁶⁾
	安田善次郎	II (T6～T10)	(大正七年)…八月には食傷もあって、大磯で多くの日を過ごした。…この九月中は東京・大磯間をしばしば往復している。大磯の別荘(寿楽庵と命名)には、裏山に遊歩道を「西国三十三番の礼所」を模してしつらえ、前年夏に第一の那智観音の石像を建立、… ³²⁾
	寺内正毅	II (T7～T8)	(明34. 3) 二日 大磯滞在、近傍ヲ散歩ス、異常ナシ…十一日 本日大磯転地療病先ヨリ帰宅ス、… ²²⁾
保養	斎藤たけ	I II (M25～M43)	明治四十三年(一九一〇)の夏、お倉は娘のおたけを連れて大磯へ避暑に出かけた。 ²⁰⁾
	原田熊雄	II (M43～不明)	…「あんまりうるさいから、二、三日大磯に行こう」七月三日に原田は東京を逃げ出したが、… ²⁶⁾
	梨本宮守正王	II III (T2～S初)	(大正十二年)七月、八月ことなく、われらは新築せし大磯へ気もゆるやかにここちよく休み中を過し、八月二十九日一同うちつれて帰京す。 ²⁵⁾
	沢田美喜	III (昭和23～不明)	久弥の長女美喜は…喜勢に育てられたおばあさんだったというから明治四十一年に久弥所有となった大磯の別荘で、のびやかに過ごした日が多かった筈である。 ¹²⁾
	吉田茂	I II III (M27～S44)	在職中、父は週末はほとんど大磯で過ごしていました。金曜日になるとさっさと大磯に引きあげ、月曜日には東京に戻ってきます。 ³⁵⁾ 昭和29年に総理大臣を辞めた後は、大磯で暮らしていましたが、毎週日曜日を「孫と遊ぶ日」と決めていたようです。 ³⁵⁾

凡例： () 内は居住期間 居住年代区域 I：明治中期～明治39年 II：明治40年～大正12年 III：大正13年～昭和35年

35) 年入居の加藤高明は、入居前に関係者が既に居住している傾向にあった。兩人共に関係者のある人物とは同時期を大磯で過ごしている。

キーパーソン5人のうち陸奥宗光を除く4人は1902(明治35)年から1907(明治40)年における5年間を同時期に大磯で過ごしていた。

表 3 大磯における別荘居住者の行動 (2)

行動	人名	居住年代	利用
海水浴	加藤高明	I II III (M25～T15)	また、其頃大磯に避暑すれば、令息令嬢又は令甥の少年達と、海水浴を日課としたこともあつたが、 ¹⁸⁾
	寺島清	I (M32～M36)	大磯に海水浴場が開かれると、芝居の合間に禰龍館に宿泊して静養したので、これが大評判となった。 ¹²⁾
園芸活動	岩崎弥之助	I II (M23～M41)	…山頂にいっぱい美しいバラが咲き乱れ、何とも言えない芳しい香りにつつまれていたものだ、… …豪華な邸宅があって、富士山のよく見える富士の間、江ノ島の良く見える江ノ島の間があった。 ¹²⁾ (昔奉公していたおばあさんの話)
	加藤高明	I II III (M25～T15)	…園藝趣味は、四十三歳(明治三十五年)の時、大磯に別荘を買入れて後に興つたもので、…忙中の日曜を、大磯別荘の牡丹、躑躅を見に行つたことが日記に記るしてある。 中にも薔薇の栽培は、…非常なる熱心を以て着手された。 ¹⁸⁾
	吉田茂	I II III (M27～S44)	…大磯では、父はバラを育てていました。バラの世話だけは自分でもしていて、…、私が知っているところではチャーチルやイーデンの自伝、シャーロック・ホームズなども英文で読んでいました。 ³⁵⁾
	田畑辰之助	II (M43～不明)	屋敷地は約300坪で、南北に長手の敷地の北寄りに主屋を建て、南側を庭とし、花壇や菜園をつくっている。昔の別荘の風情が良く残っている。 ¹⁰⁾
	島崎藤村	III (S16～S18)	庭には、蘭、椿、山茶花松、くちなし、どうだんつつじなどの木々が植えられていた。なかでも、白椿は藤村がこよなく愛した春の花であったという。 ¹⁰⁾
散策	加藤高明	I II III (M25～T15)	殊に大磯の夏には、岩崎彌之助男に奨め、その手を執つて乗り方を教へたことが日記に残つて居る。 ¹⁸⁾ (自転車に関する記述)
	梨本宮守正王	II III (T2～S初)	(伊都子の日記)大正四年八月、ふたたび大磯の夏。 午前五時ごろより、例の如く七夕祭りとて、村の子供ら、ささをうちふりうちふりエントサセ、ワッショコラとて大さわぎ。…いつもの如く、お菓子と金五十銭づつ遣したり。又、夜は御礼とて提灯をつけて来れり。 ²⁵⁾
	安田善次郎	II (T6～T10)	(大正七年)…八月には食傷もあつて、大磯で多くの日を過ごした。… この九月中は東京・大磯間をしばしば往復している。大磯の別荘(寿楽庵と命名)には、裏山に遊歩道を「西国三十三番の礼所」を模してしつらえ、前年夏に第一の那智観音の石像を建立、… ³²⁾
眺望	山県有朋	I (M20～M40)	面白いのは、母屋の海に面した縁に続けて浴室を設けていることである。海を望みながら、潮で汚れた体を休めようという配慮であり、… ¹⁰⁾
	吉田茂	I II III (M27～S44)	父は富士山がとても好きで、大磯の二階の部屋からは富士山がよく見えました。 ³⁵⁾
	大隈重信	I II (M30～T12)	大磯の別荘を自分では「掘つた小屋」と呼んだ。…ここから海岸の松林をとおして、海にのぼる朝陽を見るのが楽しみて、秘書や従者にも「早起きして日の出をおがむ」ことをすすめた。 ¹⁷⁾
	寺島清	I (M32～M36)	このころ菊五郎は軽い脳溢血をおこし大磯の別荘で静養につとめたが、…楽しみにしていた富士が見えなくなり、… ¹²⁾
	安田善次郎	II (T6～T10)	大磯の魅力は、湘南の海に近い温暖な土地柄とともに、霊峰富士の姿を楽しめる点にあるが… (王城山) その頂まで上があれば少し平らになっている場所があつて、そこから絶景を楽しむことができるのだ。…ここを「小千畳敷」と名づけ、登り口に、…歌碑を建てて公園とし、大磯町民からも大変喜ばれた。 ³³⁾
執筆活動	陸奥宗光	I (M27～M30)	陸奥は、大磯でメモワールを執筆していた。(『蹇蹇録』の執筆) ³¹⁾
	島崎藤村	III (S16～S18)	『蹇蹇録』を脱稿するころ、陸奥は、『世界之日本』と題する月刊誌を発行させて、病気の合い間合い間に、政治論文を書いては、これに掲載するのを楽しみにしていた。 ³¹⁾ …大磯へと移り住むようになるが、『当方の門』執筆中の昭和18年8月22日、脳溢血のため「町屋園」にて歿した。 ¹⁰⁾
余暇活動	山県有朋	I (M20～M40)	山縣の別荘地は字海辺にあり、「小陶庵」と称した。…歌集『椿山集』の中に小陶庵での歌が数種掲げられ、この地をいかに愛していたかが推定される。 ¹⁰⁾
	加藤高明	I II III (M25～T15)	…伯が師匠を聘して稽古した遊戯に囲碁がある。…而してその夏は、岩佐師匠を大磯に伴つて、暑い夏を数日間、盤面に對して苦行した。 ¹⁸⁾
	斎藤たけ	I II (M25～M43)	私は西行まんじゅうの「新杵」を最員にしていました。 ²¹⁾
	吉田茂	I II III (M27～S44)	…大磯では、父はバラを育てていました。バラの世話だけは自分でもしていて、…、私が知っているところではチャーチルやイーデンの自伝、シャーロック・ホームズなども英文で読んでいました。 ³⁵⁾
	三井高棟	I II III (M22～S45)	大磯ではゆっくり志ん生さんを聞く時間もできたようでした。 ³⁵⁾
	正宗白鳥	II III (T9～S8)	高棟の美意識が最も反映されたのが大磯の城山荘だった。…敷地は約三万八千坪、高棟の建築に対する知識を総動員して、…作陶場も設けられた。 ²⁹⁾
地域貢献	松本順	I (M20～M40)	少年期のような読書慾が復活したのは、四十余歳で大磯に引き籠つてからの事で、外に仕様事のなさの読書三昧であった。 ²⁷⁾
	山県有朋	I (M20～M40)	松本は熱心に海水浴の効能や町の繁栄策として前途有望の事などを説きかせた… ²⁸⁾ 黙阿弥に筆をとらせ曾我物語を材料とした、「名大磯湯場の対面」を上演し大磯海水浴場の宣伝につとめたのである。 ¹²⁾
	西周	I (M25～M31)	…東海道の開通に伴う大磯ステーションの設置に尽力した。 ¹²⁾
	伊藤博文	I II (M29～M42)	このころ大磯には道らしい道はほとんどなかったもので、森村市太郎・浅野総一郎・高木兼寛・西周・三嶋弥太郎・有村国彦・肥田景之らの家屋設置者と…の連名で鉄道庁長官宛に、次の「御用地内道路設置願」を明治二十六年九月二十一に提出した。 ¹³⁾
	原六郎	I II (M35～M44)	…南本町宮代屋旅館炊事場煙突から出た火のため、またたくまに北本町・神明町・山王町・長者町など全町の約半分、六百四十戸を焼いてしまった。…町内からも伊藤博文、岩崎弥之助各三百円をはじめ多額の救援金がおくられた。 ¹²⁾
	岩崎久弥	II III (M41～戦後)	…三十九年に受益者負担で統監道路を新設したとき、古河虎之助七百元、原六郎・隈本栄一郎各四五百円、伊藤博文・鍋島直大・三井八郎右衛門各三百円、山県有朋百五十円、西周寺公望・清水満之助・上郎幸八各八百円、…の寄付金であったから、原別荘の重さが自然と知れよう。 ¹²⁾
	沢田美喜	III (昭和23～不明)	こんな不便な状態をみかねた町長と町の有志は岩崎久弥に窮状を訴えた。久弥は厳しい戦局の行末を見極めていたので町の申出を受けて農場約千六百坪を運動場として寄附した。 ¹²⁾ (大磯小学校に関する記述)
			…美喜は、財産税のため手放した大磯の別荘を借り受け、混血児の保育事業を始め、最初の寄附者である、エリザベス・サンダース女史の名を施設の名とした。 ¹²⁾

凡例：() 内は居住期間 居住年代区域 I：明治中期～明治39年 II：明治40年～大正12年 III：大正13年～昭和35年

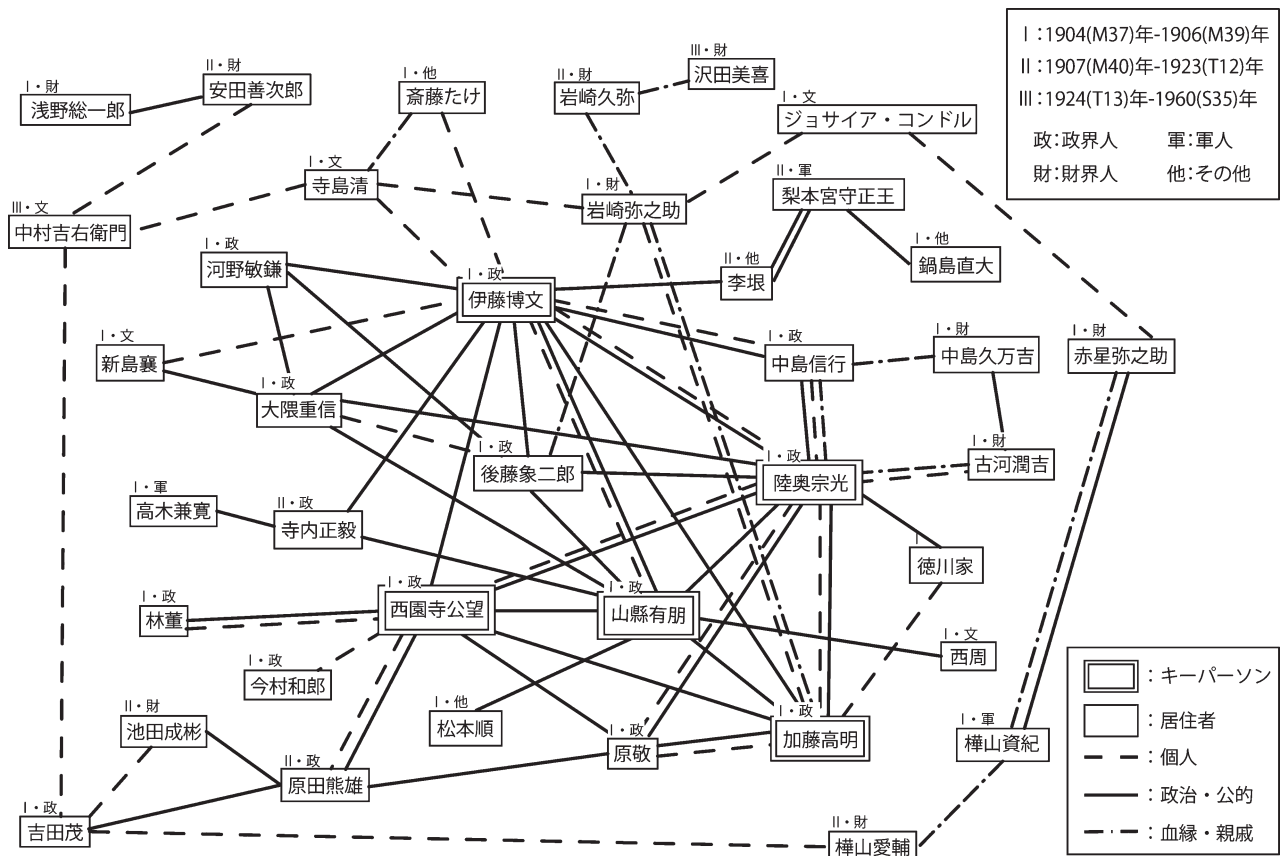


図 1 大磯別荘居住者の人物相関図

次に人物相関を分析した38名の別荘所在地の分布状況を分析した。伊藤博文が入居するまでの所在地は、東小磯、大磯周辺に分散して分布していた。しかし伊藤博文入居後は西小磯の伊藤博文邸周辺への居住傾向が見られた。そこで、居住時期における別荘所在地の分布の特徴を分析した。

(3) 別荘地の分布傾向および変遷の解明

a) 大磯の景観的特性に基づく領域区分

国土地理院保有、明治29年測量2万平方図(1:20,000)を使用し、視点と外的な対象との間の関係性である視覚的な景観のまとまりに着目し領域区分を行った³⁷⁾。領域区分の範囲は、対象居住者の別荘地が立地した範囲で設定した。西側は国府本郷と西小磯の境界線付近から、東側は高麗や東町までを対象とした。尾根と谷および水系の位置を整理し、丘陵の山頂の標高を基準に(図3)領域を8つに区分した。その結果、大磯の別荘地は丘陵地と海の間の緩傾斜地の狭い範囲に立地していることが明らかとなった。また各領域規定要素および眺望の主対象となる丘陵のピークは領域毎に全て異なっていることが推察された(表4)。

そこで現地調査を行い、設定した各領域内からの眺望の主対象の見え方を確認した。その結果、領域毎に別荘地の背景となる主対象の丘陵は全て異なることが確認できた。

b) 別荘地内の領域区分における分布傾向

領域区分を入れたベースマップ上に居住年代と職業属性を加味して別荘所在地をプロットした(図4)。

領域区分における別荘地数を分析した結果、エリアD(51件)が最も多く、エリアF(47件)、エリアA(46件)、エリアE(36件)も多く立地していたことが確認できた。一方でエリアCに別荘地は存在しないことがわかった(図4)。

c) 居住年代と領域区分の傾向分析

次に3期に区分した居住年代における各領域区分の入居傾向を分析した。

第Ⅰ期(1904-1906): エリアF(34件)、エリアA(28件)への入居が多く確認された。エリアFには1887(明治20)年に大磯駅が開設されており、東京への利便性確保によるエリア選択が考えられた。またエリアAは、1896(明治29)年の伊藤博文の入居がエリア選択に影響を与えたと推察される。

第Ⅱ期(1907-1923): エリアD(27件)の入居が多かった。標高20m~60m地点まで、特に山際の標高20m~30mまでの緩傾斜地に多くの別荘地が分布していた。

第Ⅲ期(1924-1960): 入居数は多くないが、エリアD(10件)、エリアH(7件)の入居が確認された。エリアDでは標高20mの際への入居が多数であるのに対し、エリアHでは標高20m~80mの急斜面地への入居が多い特徴がみられた。

d) 各領域区分の居住年代毎の変遷

各領域区分内において居住年代毎における別荘地の立地特性について分析を行った(表5、図5)。

エリアAは第一期(28件)、第二期(13件)に入居が

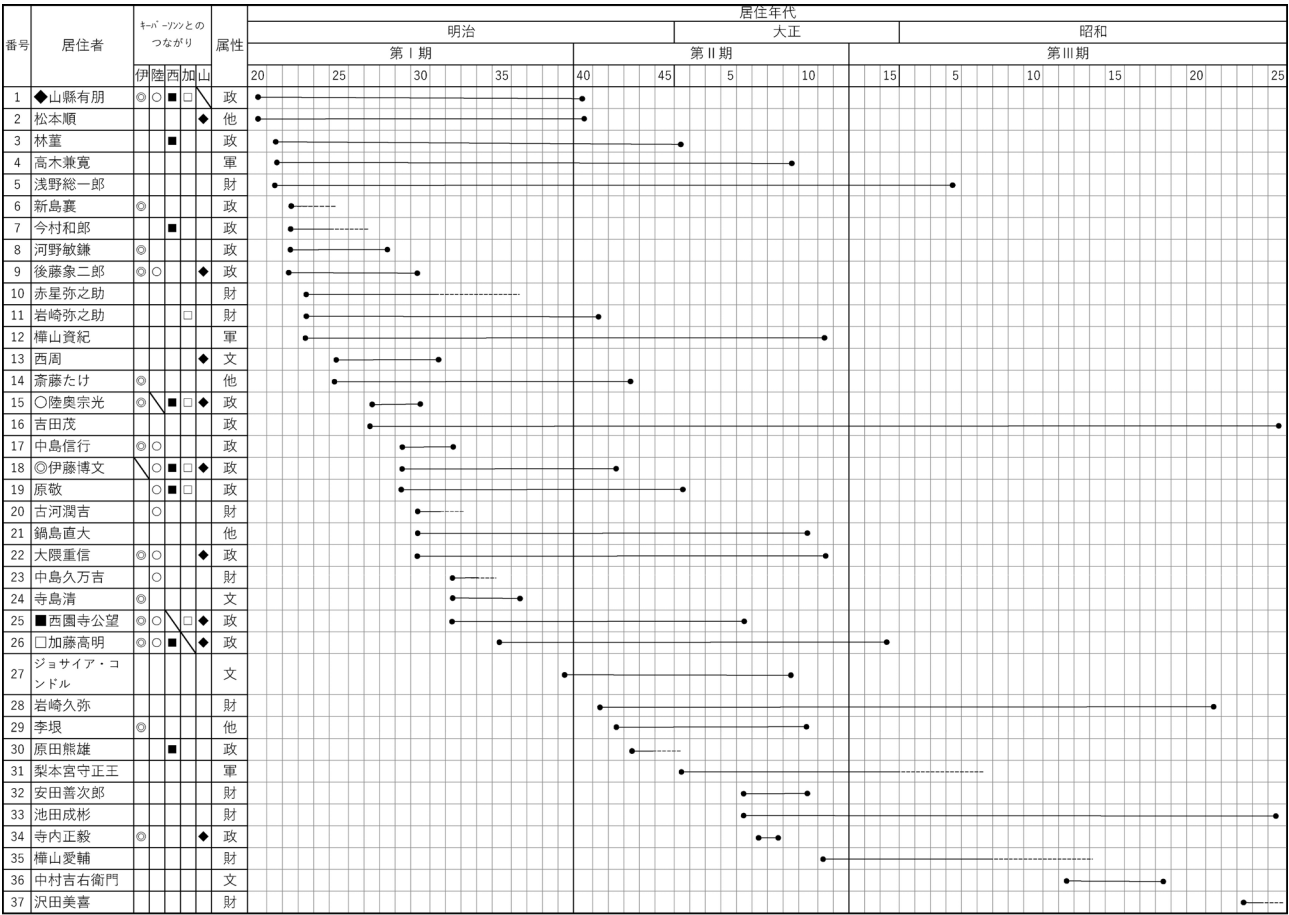


図 2 大磯別荘居住者の居住年代と居住者間の関係

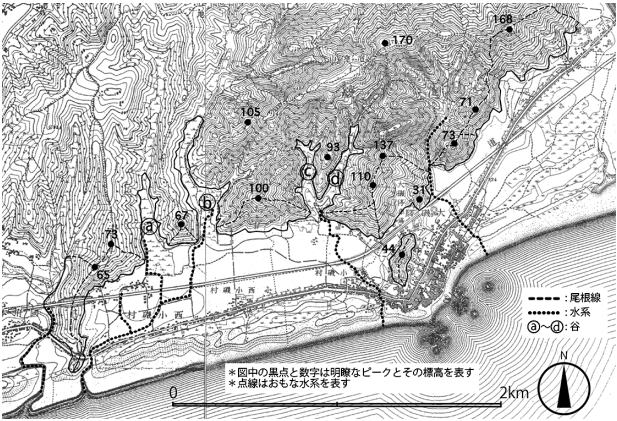


図 3 大磯の景観的特性

多かった。明治 20 年代初期、別荘地形成は領域東部の既存市街地周辺で始まる。しかし、1896（明治 29）年の伊藤博文の領域中央への入居に伴い、領域中央の入居が増加していった。明治後半以降は、また領域東部への入居傾向へと変化していた。なお、全期間を通して領域西部への入居はほとんど見られなかった。

エリア B でも第一期（10 件）の明治 20 年代のまとまった入居見られた。1889（明治 22）年に三井高棟、1894（明

表 4 大磯の景観的特性に基づく領域区分

領域区分	範囲	領域境界				景観の特性
		西	北	東	南	
エリア A	西小磯、東小磯 大字大磯	血洗川	東海道	海	海	緩やかな微高地と 松原
エリア B	国府本郷と 西小磯の境	不動川	65mピーク から 東海へ下る尾 根線	血洗川 73mピークへの旧 道	海	南北方向の半島
エリア C	西小磯	東海道から 73mピークへの道	谷 a へ下る 東西両側面の 尾根線 (73m ピークと 67mピーク)	谷 b からの小川	東海道	谷 a (谷津田) の谷口
エリア D	西小磯、 一部東小磯	谷 b からの小川	谷 b・谷 c へ 下る東西両側 面の尾根線、 中心は 100mピーク	東海道から 谷 c 谷 d へ向 かう道	東海道	100mピークへの山が 北側正面
エリア E	東小磯	東海道から 谷 c・谷 d へ向 かう道	谷 d を 形成する 西側面の尾根 線、110mピーク	110mピークから の 南へ張り出す 尾根 小川	東海道	110mピークの丘陵地 の麓 谷 c・谷 d からの小川
エリア F	大字大磯	110mピークから 南へ張り出す 尾根と山麓か ら海へ向かう 道	谷 d を形成す る南北方向の 尾根 (137 m ピークと 110 mピークあり) と 137mピークか ら南東方向へ 伸びる尾根	小さな谷から 南下する小川	海	大磯駅 44mピークの瓢箪型 の単独微高地 あり
エリア G	大字大磯、現東町	小さな谷から 南下する小川	小さい谷へ下 る南西、北東 両側面の尾根 線、中心は 73mピーク	低地の畑地と 水田・松林の 境界	海	73mピークへの山が 北側正面
エリア H	大字大磯、 東町、高麗	低地の畑地と 水田・松林の 境界	高麗山 (168m ピーク) 71mピーク、 73mピークの 丘陵地の連なり	低地の松林・ 水田と 畑地の境界	海	丘陵地の連なりと 高麗山の麓 南に水田と松原

治27)年に吉田茂が別荘地を作っている。エリアBの環境資源である半島南側の海方向への緩傾斜地への立地が特徴と言える。

エリアFも同様に第一期(34件)の入居が多く、明治20年代前半に大磯駅背後の南東向き傾斜地および駅南側低地に別荘地が立地し始める。明治20年代後半は、大磯駅背後の南向き傾斜地へと開発が拡大する傾向が見られた。その後は大磯駅と東海道沿い市街地の間への入居が進展した。

エリアGは第一期の入居が多いが、明治30年代に松林と水田が広がる海近傍の低地に別荘地の立地が確認できた。

エリアEは第一期(14件)、第二期(11件)と別荘地が増加し続けた。明治中期に傾斜地から入居が始まり、以後時代を経る毎に低地へと南下する傾向が見られた。

一方、エリアDにおいては第一期の入居は少なく、第二

期(27件)、第三期(10件)の入居の方が多かった。明治末期に標高20m~30mの緩傾斜部分から入居が始まっていた。大正期にかけて標高が高い方へと開発が進み、昭和期の入居はまた緩傾斜部分で確認できた。しかし、標高20m以下へ南下した別荘地は存在しなかった。

最後にエリアHでは、第一期(6件)、第三期(7件)の入居が確認された。明治期には松原と水田からなる低地に別荘地が存在していたが、昭和期の入居はエリア北側の丘陵地南東側の傾斜地へと変化していた。

4. 考 察

明治20年代から昭和30年代における大磯の別荘居住者間の関係特性を明らかにするために、職業属性を踏まえた関係性について分析を行った。別荘地形成初期に多数入居した政界人のコミュニティを中心に、時代を経ると共に財界人、文化人らも含めた多様な居住者へと関係性が広がっていったことが明らかとなった。

別荘地形成のキーパーソンは、従来から指摘されていた伊藤博文の他に、陸奥宗光、山県有朋、加藤高明、西園寺公望が存在した。彼ら5名の重複した政界人との関係性が大磯における別荘地コミュニティの特徴といえる。

一方で、キーパーソン毎に別荘居住者との関係性のタイプは異なっており、その多様性が大磯に財界人、文化人らを招き入れた要因のひとつと推察される。

別荘地における行動に関しては、従来から指摘される海

表5 領域区分における年代区別の居住者

年代区分	領域区分							
	A	B	C	D	E	F	G	H
第I期	28	10	0	2	14	34	10	6
第II期	13	4	0	27	11	9	1	1
第III期	3	0	0	10	5	1	1	7
不 明	2	1	0	12	6	3	2	0
計	46	15	0	51	36	47	14	14

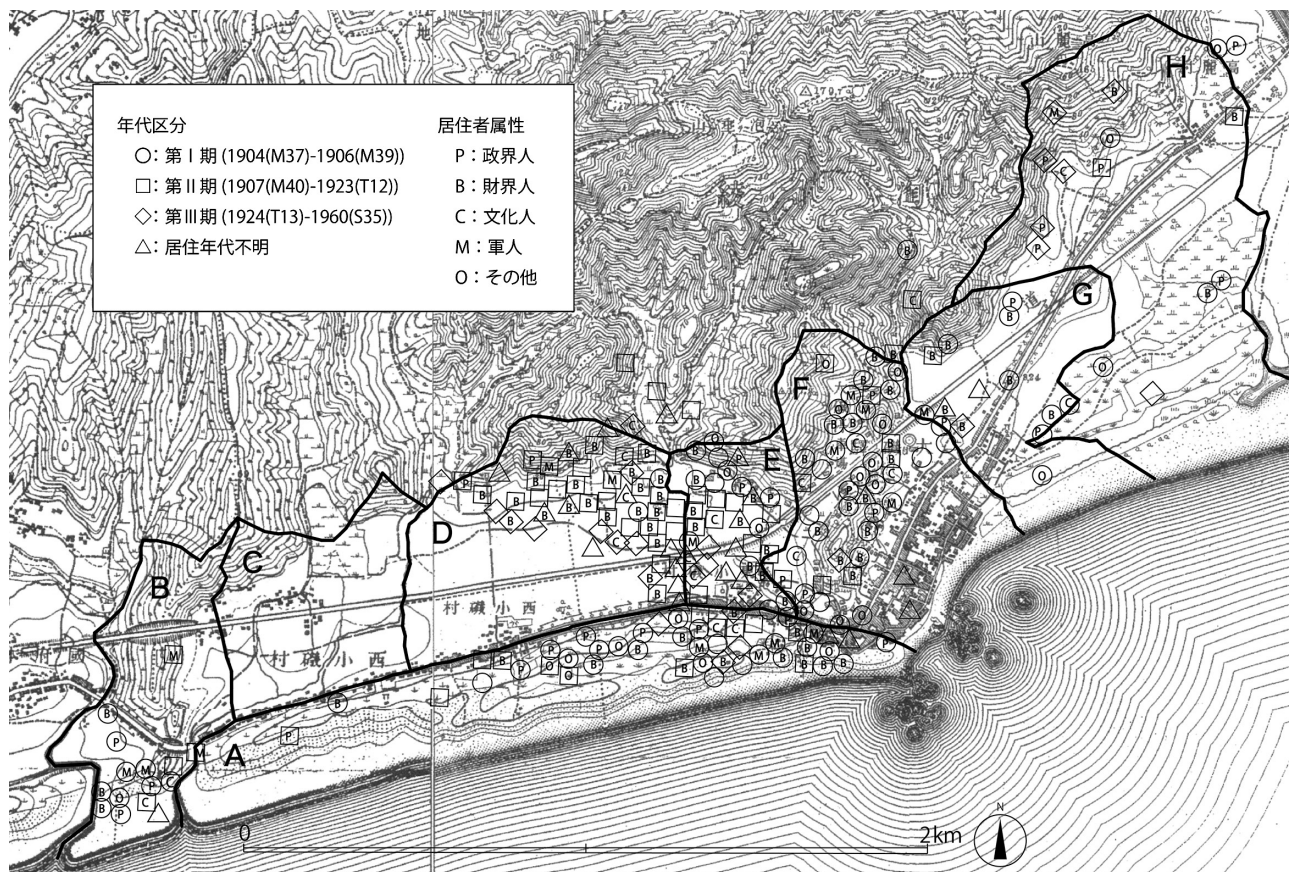


図4 大磯における別荘地の分布状況

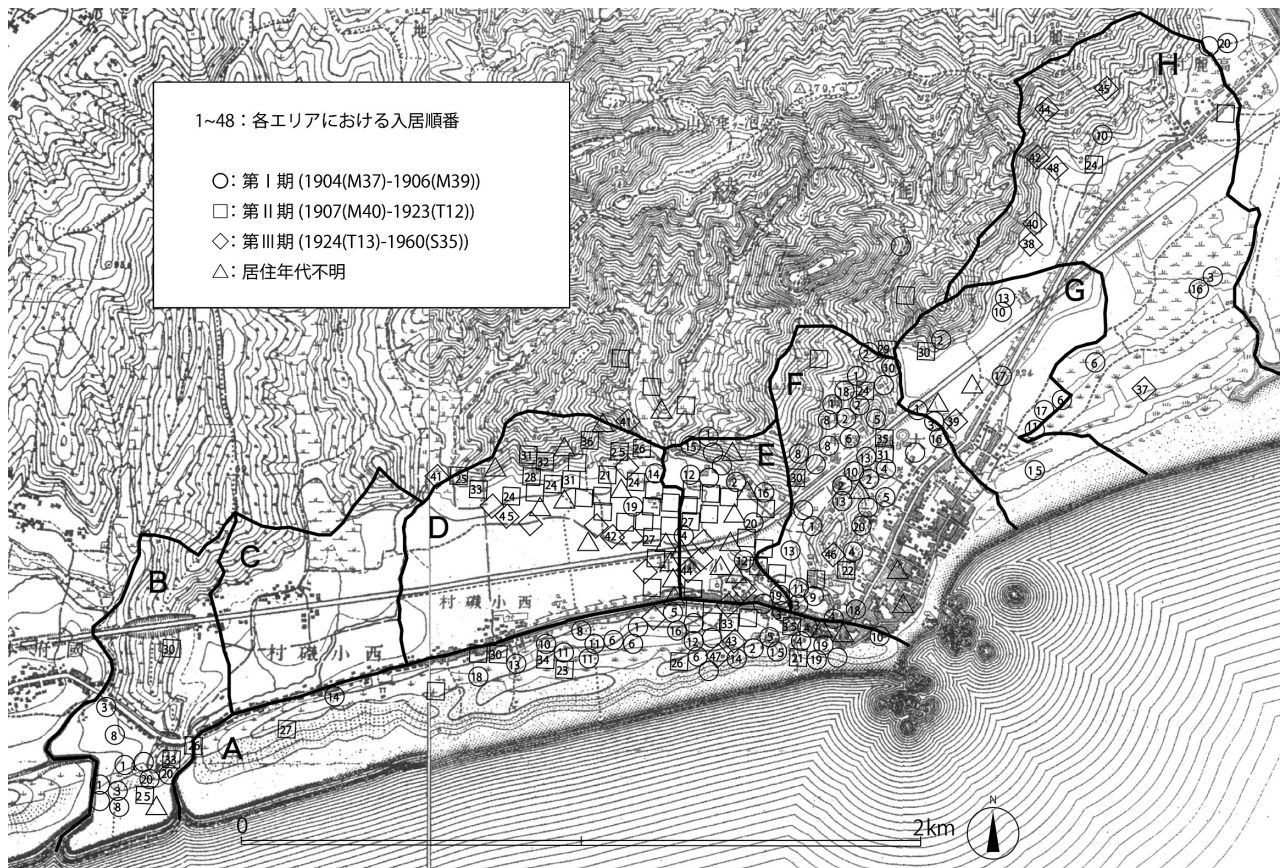


図 5 大磯における領域内の居住順番

水浴利用に加え、別荘居住者や来訪者との交流や眺望、室内・庭園内での余暇活動が多数確認された。一方で、丘陵地やエリア B, C, D, H に存在する田園地帯に身近な自然が存在するにも関わらず、それらに対する評価や嗜好的行動に関する活動は本研究では確認できなかった。同時代、東京近郊の他地域では身近な田園風景を嗜好する別荘地の展開がみられる中、大磯における別荘居住者の嗜好性の変容解明については今後の課題といえる³⁸⁻⁴⁰⁾。

大磯の丘陵地および緩傾斜地という地形特性を基盤とした景観の特性は、別荘地選定の時代変遷と関係していることが伺えた。丘陵地の尾根や水系の状態に基づく 8 つの領域（エリア）において、居住年代毎の別荘地立地の傾向に特徴が表れていた。

眺望の主対象ともなる別荘地背後の丘陵頂上（標高 100 m 程度）は、エリア毎に異なっていた。また各エリア内における標高 20 m～80 m の斜面に別荘地が立地していた。居住年代毎に入居が多いエリアは変化し、同一エリア内においても居住年代毎に別荘地立地に傾向がみられた。明治期の別荘が山裾の緩傾斜地に立地し、背後の丘陵地に抱かれるような景観を嗜好するのに対し、大正期以降は丘陵地の急傾斜地自体に別荘地が立地する傾向にあった。明治期の松原越しに眺める海に対して、より高所から眺める海の景観や山林内の景観へと別荘居住者の嗜好が変化した可能性もあり、今後の研究課題といえる。

本研究成果により、現在大磯で進められている別荘建築

物と庭園からなる「大磯邸園構想」に加え、大磯の地形特性を加味した、より広範囲なランドスケープの観点による大磯における別荘地の評価を行う可能性を示唆できた。今後は、別荘地形成期と同時期の別荘地以外の文化的景観（生業、生活の景観）を別荘地景観の「地」として位置づけ、価値づけのための調査が必要であると考えられる。

参考文献

- 1) 国土交通省 (2017) 明治 150 年関連施策明治記念大磯邸園（仮称）の設置を閣議決定. <http://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10_hh_000263.html>（最終アクセス 2020 年 02 月 17 日）
- 2) 明治期の立憲政治の確立等に貢献した先人の業績等を次世代に遺す取組に関する検討会 (2017) 明治期の立憲政治の確立等に貢献した先人の業績等を次世代に遺す取組について（報告書）. <http://www.ktr.mlit.go.jp/showa/ooiso/kihonkeikaku/dailkai/sankoul.Pdf>（最終アクセス 2020 年 02 月 17 日）
- 3) 大磯町都市計画課 (2009) 大磯町景観計画. 大磯町. pp. 26-41.
- 4) 十代田朗, 渡辺貴介, 安島博幸 (1992) 戦前の関東圏における別荘の立地とその類型に関する研究. 日本建築学会計画系論文報告集 第 436 号: 79-86.
- 5) 十代田朗, 渡辺貴介 (1995) 明治期の大磯「禱龍館」及び、稲毛「海気館」にみる海浜リゾート計画思想に関する比較研究. 日本都市計画学会学術研究論文集 30: 19-24.
- 6) 水沼淑子, 加藤仁美, 鈴木伸治 (2006) 湘南地域における住宅地形成と景観構造の変容に関する研究. 住宅総合研究

- 財団研究論文集 No. 33 : 111-122.
- 7) 水沼淑子 (2011) 明治大正期における大磯町西小磯の別荘建築. 日本建築学会学術講演便概集 : 241-242.
 - 8) 水沼淑子 (2012) 明治大正期における大磯町東小磯の別荘建築. 日本建築学会学術講演会建築歴史意匠 : 9-10.
 - 9) 水沼淑子 (2016) 明治期家屋台帳による大磯の初期別荘建築の実態. 日本建築学会計画系論文集 第 720 号 : 467-476.
 - 10) 大磯町教育委員会 (1992) 大磯町文化財調査報告書 第 37 集 大磯のすまい. 大磯町教育委員会, 大磯町.
 - 11) 大磯町 (2008) 大磯町史通史近現代. 大磯町教育委員会, 大磯町.
 - 12) 鈴木 昇 (1990) 大磯の今昔 (四). 鈴木 昇, 大磯町.
 - 13) 鈴木 昇 (1992) 大磯の今昔 (五). 鈴木 昇, 大磯町.
 - 14) 鈴木 昇 (1994) 大磯の今昔 (六). 鈴木 昇, 大磯町.
 - 15) 浅野総一郎 (2010) 伝記叢書 351 伝記 浅野総一郎. 大空社. pp.42.
 - 16) 伊藤正徳 (1995) 伝記叢書 175 加藤高明 上巻. 大空社. pp.48, 184, 368, 375, 507, 584.
 - 17) 榛葉英治 (1985) 大隈重信一進取の精神 学の独立 (下). 新潮社. pp.201, 230.
 - 18) 伊藤正徳 (1995) 伝記叢書 175 加藤高明 下巻. 大空社. pp.752, 753, 755, 768, 782.
 - 19) 岩井忠熊 (2003) 西園寺公望. 岩波書店. pp.78, 122, 139, 153, 164.
 - 20) 樋口いく子 (2009) ハマの風 富貴楼お倉物語. 幻冬舎ルネッサンス. pp.310.
 - 21) 鳥居 民 (1997) 横浜富貴楼 お倉. 草思社. pp.61, 97, 254, 255.
 - 22) 山本四郎 (1980) 京都女子大学研究叢刊 5 寺内正毅日記——一九〇〇～一九一八一. 京都女子大学. pp.91, 98, 759, 762.
 - 23) 町田市立自由民権資料館 (2016) 民権ボックス 29 号 中島信行と俊子. 町田市教育委員会. pp.13, 31, 33, 41.
 - 24) 河竹繁俊 (1955) 中村吉右衛門. 富山房. pp.467, 513.
 - 25) 小田部雄次 (1991) 梨本宮伊都子の日記. 小学館. pp.126, 172.
 - 26) 勝田龍夫 (2014) 重臣たちの昭和史 (下). 文藝春秋. pp.19, 175, 360, 445.
 - 27) 正宗白鳥 (1994) 作家の自伝 5 正宗白鳥. 日本図書センター. p.6.
 - 28) 鈴木要吾 (1994) 伝記叢書 137 蘭学全盛時代と蘭疇の生涯. 大空社. p.246.
 - 29) 高橋栄一 (2013) 東京人 2013-12. 都市出版. p.20.
 - 30) 佐々木雄一 (2018) 陸奥宗光「日本外交の祖」の生涯. 中央公論社. pp.93, 138, 243, 261, 263, 286.
 - 31) 岡崎久彦 (2003) 陸奥宗光とその時代. PHP 文庫. pp.565, 571, 573.
 - 32) 由井常彦 (2010) ミネルヴァ日本評伝選 安田善次郎—果報は練って待て—. ミネルヴァ書房. pp.322.
 - 33) 北 康利 (2010) 陰徳を積む 銀行王・安田善次郎伝. 新潮社. pp.270.
 - 34) 伊藤之雄 (2009) 山縣有朋—愚直な権力者の生涯. 文藝春秋. pp.36, 239.
 - 35) 麻生和子 (2012) 父 吉田 茂. 新潮社. pp.231-234, 240, 249, 259.
 - 36) <http://www.town.oiso.kanagawa.jp/isotabi/miryomi/hassyou/kaisuiyoku.html> (最終アクセス 6 月 18 日)
 - 37) 樋口忠彦 (1975) 景観の構造. 技法堂出版.
 - 38) 十代田朗, 安島博幸, 安井裕之 (1992) 戦前の武蔵野における別荘の立地とその成立背景に関する研究. 造園雑誌. 55 (5) : 373-378.
 - 39) 石川直生, 荒井 歩 (2011) 文化人の描写に基づく我孫子の景観構成要素の把握. 東京農業大学農学集報. Vol. 56, No. 2 : 190-198.
 - 40) 久保有生, 荒井 歩 (2019) 杉村楚人冠による我孫子・手賀沼における景観保護活動の取り組み. 東京農業大学農学集報. Vol. 64, No. 3 : 92-107.

A Study on the Change in the Relationships of Residents and Locational Feature in the Area of Villas in Oiso, Kanagawa

By

Nanami OYAMA* and Ayumi ARAI*[†]

(Received February 20, 2020/Accepted July 17, 2020)

Summary : Oiso, Kanagawa prefecture has a warm climate. Therefore it drew attention as an area suitable for the villas in the Meiji era. A beach was established in Oiso in 1885 by Jun Matsumoto, an army surgeon. Because this was made, an area of villas was developed, and Oiso Station of the Japanese National Railways Tokaido Main Line started a business in 1887. The first Prime minister, Hirobumi Ito lived in Oiso from 1896, and from this influence, many important people in the political and business worlds and people of culture started living in Oiso. This study investigated the occupations of the residents and the location of the villa, and we analyzed the relations between villa residents to clarify the state of the community. In addition, we made clear the action properties of the villa residents in Oiso. Furthermore, I analyze the tendency of the location of the villa to influence every the time of entry to the villa and examine the relations with the characteristics of the scenery of Oiso. As a result of this study, the following were found. The community led by politicians existed in the area of the villas. Five people, Hirobumi Ito, Munemitsu Mutsu, Kinmochi Saionji, Komei Kato, and Aritomo Yamagata were found to have been key people in the community. As a result of having investigated ways to spend time as villa residents in Oiso, they had a conversation about politics or carried out sick medical treatment for the sick. In addition, they made a contribution to the regional community. Then, the extent of the area of the village allowed a division of the topography into eight domains. Next, we searched the location of the area of villa in each domain. Therefore, the tendency to particular characteristics in the location of the area of villa was elucidated for each period.

Key words : villa, location, topography, landscape, Oiso

* Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture

[†] Corresponding author (E-mail : ayumi@nodai.ac.jp)